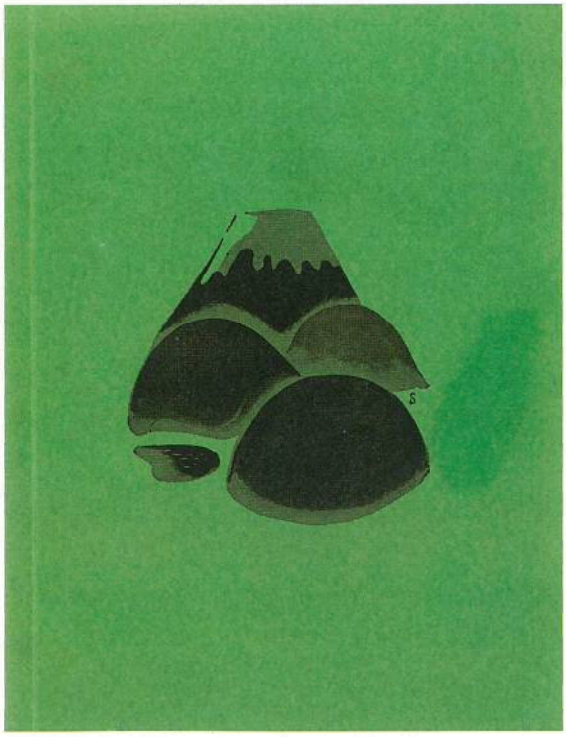
足がら山　物がたり

もくじ

●ヤトのまき
1．石のつぶて
2．おとりのかご

●ジロッポのまき
3．足あとを消しながら
4．なわを回して

●ツキノワのまき
5．赤い花の悪ま
6．山つなみ



発行　ボーイスカウト日本連盟
（昭和54年3月）

「足がら山物がたり」配布について

神奈川連盟では６０周年記念にあたって資料集「源流を探る」を発行いたしました。カブ隊の指導者向けにはこの度、「足がら山物がたり」を配布いたします。日本連盟で絶版になった資料を復刻しても・・・また、この時代に冊子では・・・とコミッショナーグループも悩みましたが敢えて冊子にいたしました。最近、日本のカブスカウトのバックグラウンドが忘れ去られてきたこと、また、神奈川は足柄山のお膝元であることより多くの神奈川の指導者の目に触れて頂きたいのが配布の動機となっていますのでご理解ください。
「カブ」って？　それは英語で動物（主に肉食獣）の子どものことです。
それでは「ウルフカブ」って？それはイギリスのカブ隊、創始者ベーデン-パウエル卿がボーイスカウト未満の子供達のために考案、文豪キプリングの「ジャングルブック」をバックグラウンドに誕生しました。戦後、日本にボーイスカウトが復活した当時、「狼」ではイメージが悪いということになり、「足柄山の金太郎」を下敷きに「足がら山物がたり」をつくり、その登場人物である、うさぎの「ヤト」、鹿の「ジロッポ」、クマの「月の輪」が進歩章のシンボルとなったのです。集まったときにカブコールをするのも、組をデンと呼ぶのも、スカウトへ上進前のカブを月の輪と呼ぶのも、また、金太郎にまつわるカブソングが多いのもこのストーリーがあってこそ理解できるのです。
最後に我々コミッショナーグループの夢を披露します。この小冊子をカブスカウト隊の指導者がスカウトにお話ししていただき、各隊で現代にマッチした「新物語」または「続物語」若しくは「物語外伝」がスカウトたちの想像力で神奈川のカブ隊で誕生することです。期待しています。

日本ボーイスカウト神奈川連盟　コミッショナーグループ

ヤトのまき

1.　石のつぶて

今から千年も大昔の、天延という年号のころの物がたりであります。
広い広い大空の東から、春の日が、緑の風に乗って、あたたかい光を投げながらやって来ました。
ここは、相模の国と駿河の国とにまたがったあしがら山の高いいただきであります。
春が来たといっても、西の向こうに見える富士の山は、まだまっ白で、このとうげの山かげにも、のこりの雪が見られました。
その雪の上に、こじかの足あとを発見した金太郎は、
「ジロッポの足あとだ――」
と、うれしくなりました。そして、その足あとをおって、尾根のうらまでやって来ましたが、そこからは、ふかい谷間で、谷ぞこには、酒匂川の上流が流れていて、岩の上を流れる水は、きれいにすみ切っていました。
その谷川の切り立ったがけの上には、大きな杉の林があって、南がわのけわしいがけぎわから、つばきの木が一本、枝を谷間へつき出すようにして、まっ赤な花を咲かせていました。
そして、このけわしいがけの、どこを、どうしておりたのか、こじかのジロッポが……
コツン！コツン！
小づのの根もとを、つばきのみきへ、こすりつけていました。

しかのつのは、毎年春になると、去年からのつのがおちて、また新しいつのがはえかわります。ジロッポも、つののおちる前なので、つのの根もとがかゆくて、そうしていたのでしょう。

だが、金太郎は、ジロッポが、つばきの木に、いたずらをしているのだと思って、

「お―い、ジロッポ、がけをおりてはあぶないよ、それに、そんなに立木をいためるものではない――早く、ここへ上がっておいで――」

と、しかるようによびかけました。

すると、金太郎だとわかってうれしくなったジロッポが、思わず、げん気に大きくはね上がったので、かえって、

「コツン！」

と、つばきの枝へ、小づのを強くつき当てました。それで、つき出た枝のさきから、咲きほこった花の一りんが、ほろりとおちて……

ポトンと、水音を立てました。

そして、すきとおるような流れのうずに、くるくるまいながら、美しいつばきの花が、向こう岸の下手のほうへ、小舟のように流れて行きました。

その行手の、大きな岩かげに、なにか、黒いけものがいます。

金太郎は、けものを見つけて、ハッとしました。

「黒い山犬だな――」

そう思ってよく見ると、山犬ではありません。黒いけものは、太っちょで、後足だけ流れにつかって前かがみになり、岩と岩との間をのぞきこんで、右の前足を手のようにつかって岩あなへさしこみ、なにか一心に、とらえようとしていました。

が、そのとき、けものの足もとへ、花の小舟が流れて来ると、そのけものは、これを見てゆだんしたのか、うっかり右前足を、岩あなのおくふかくへ、さしこんだようです。

「いたいっ、いたいっ」

と、ベソ声を立てて、急に岩あなから、右の前足をひきぬき、人間のように後足だけで、まっすぐに立ち上がりました。

「あっ、くまの子だ、月のわぐまの子だ――」

そうです。そのけものの前首に、白い三日月がたのむな毛が見えます。こぐまは、朝ごはんのごち走に、さわがにをとらえようとしていたのです。

こぐまは、ひきぬいた足の指さきを、いたそうにふってから、ぺろぺろなめ終わると、また、もとのように前かがみになって、こんどは、用心しながらまた前足を、そ―っと、岩あなへさしこみました。

が、あなのおくでも、子がにたちをまもって親がにが、青光りした大きなはさみを、ぐっとのばして、待ちかまえていました。

そして、こぐまの指さきへ、

「こぐまなどに、負けてたまるか――」

と、力一っぱいはさみつきました。

「いたたたたっ、いたい、いたい！」

こぐまは、さわがにはさみつかれたままの右前足を、いたそうにひきぬいて、さわがにをふりはなそうと、人間の手のようにぐるぐる、強くふりまわしました。

それで、さわがには、目がまわって、山や谷や流れまで、くるくるまわって見えます。

「助けてくれ――！
と、さけびましたが、頭のなかが、クラクラッとして、耳のおくが、ジーンと、はげしく鳴って、なにもかもわからなくなってしまいました。

そして、ハッと、思ったときには、こぐまの指さきから、強くふりはなされて、ブーンと、半円けいをえがきながら投げとばされ……

バサッと、さわがにのおちたところは、大きなくりの木の、高い枝と枝との間に、まるく作られているりすのすでありました。

すると……

りすのすでは、思わぬお客のさわがにが、青みがかった大きなはさみを、ぬぅ―っとおし立てて、ブツブツあわを吹いているので……

「たいへんだ。たいへんだ――」

「天から、さわがにがふって来たよ――」

りすの家ぞくは、大さわぎになりました。

それでなくても、りすの家ぞくは、いつもくりの木の、枝から枝へと、いそがしくかけまわる運動が、大好きのようです。でも、きょうは、いつもの運動どころではありません。

特に、りすの子どもたちは、まだ見たことのないさわがにの、かたい甲らを着た横ばいのすがたが、おそろしくておそろしくて、ただもう、あちらこちらへ、せわしくにげまわって、さわぎ立てました。

また、親りすのなかにも、一ぴきのおく病者の父りすがいて、

「天から、さわがにがふって来た。さわがにの、おばけがふって来たよ――」
と、あわてふためいて、みきを下へかけおり、くりの木の根もとの、つみ石とつみ石との、小さいすき間へ、サッと、とびこんで行きました。

そこは、冬毛の白い野うさぎの一家が住んでいる石あなで、出入口は、やっと親うさぎが通れるだけの、せまいすき間ですが、石あなのなかは、野うさぎ一家の七わが、じゅうぶんくらせるだけの広さがありました。

野うさぎの家ぞくは、自分たちより小さい父りすには、だれもおそれはしませんが、

「天から、さわがにの、おばけがふって来た。おばけがふって来た――」
と、父りすが、そうぞうしく、さわぎ立てるので、野うさぎの父親がたまりかねて、

「「りすのおとうさん、りすのおとうさん、もう少し、しずかにしてくださいませんか――」

そういって、ちゅう意すると、

「これが、しずかにしていられますか。くりの木の高い枝にある私らのすへ――川岸に住んでいるさわがにが、しかも、天からふって来たのですよ。そのうえ、大きな青づめをふり立てて、ブツブツあわを吹いています――今に、おたくへも、そのおばけが、きっとやって来ますよ――」

「ハヽヽヽヽ、りすのおとうさんは、さわがにが、そんなにおそろしいんですか――」

「ハヽヽヽヽ、りすのおとうさんは、さわがにが、おそろしくておそろしくて、ならないんだって――」

「ワ、ハヽヽヽヽ――」

野うさぎの家ぞくは、みんな一しょになって、父りすのおく病さをわらいました。

「でも、川岸に住んでいるはずの、さわがにが、天からふって来る――これは、かならず、おばけにちがいない――」

父りすは、ほんとうに、さわがにのおばけだと思っているようです。

そのとき、こうさぎの一わは、おとなたちが、つまらないことをいつまでも、くどくどいい合っているので、ばからしくなって、石あなから外へとび出すと、川岸づたいにわか草の上をピョンピョンはねて行きました。

すると……

谷川の流れにつき出た大きな岩の上で、つばさを休めながら、するどい目を光らせて、え物をさがしていた大わしが、こうさぎを見つけて、

「しめしめ、朝めしのさかなが、わざわざ自分のほうから、ピョンピョンやって来た—」

と、大きなはばたきの音を立ててとび立ち、するどいくちばしをとがらせ、ぐっと足のつめを開いて、ただ一つかみにしてやろうと、おそいかかって来ました。

で、こうさぎは、そのおそろしさに、早や気をのまれてしまって……

「おかあさん——」

助けをよぼうと思っても、のどから声も出て来ません。ぶるぶるふえながら、その場へすくんでしまいました。

また、近くの岩かげで、さわがにをさがしていたこぐまも、強いはばたきの音を聞いてふり向き、大わしのすさまじいあり様を見て、

「ぼくのほうは、大わしがとんで来ませんように——」

と、両目をつぶって、ガタガタふるえていました。

が、そのとき、

向こう岸から、あっという間もなく、石のつぶてが、

ヒュー！　と、矢よりも早くとんで来て、大わしのつばさを、ハッシと、たたきつけたので、パラッパラッと、はねが七、八枚、空中へとびちりました。

こうさぎは、さぁ、この間にと、ピョンピョンはねて……

「おかあさん！大わしが——」

と、一生けんめい、せまい出入口から、石あなのなかへにげこみました。

大わしは、おそろしい目を、ギョロッと光らせて、

「だれだっ——鳥の王様の、このおれ様に、石を投げつけるとは——」

そういって、石のとんで来たほうを、ぐっとにらみつけました。

だが、なにを見つけ出したのか、急に、げん気がなくなって大わしは、バサッバサッとつばさをひる返すと、遠く東にそびえて見える丹沢山のほうへ、すごすごにげて行ってしまいました。

それで、こうさぎは、岩のすき間から、大わしのとび去ったのを見て安心し、みじかいしっぽをちぎれるようにふりふり、石あなのなかから出て来て、うれしそうに赤い目をくりくりさせて、

「だれが、ぼくを助けてくれたんだろうか——」

と、ひとりごとをいって、ふしぎに思いながら、向こう岸をながめました。

すると、向こう岸の、つばきの木の下で、一ぴきのこじかが、前足で、トントントンと、地面をたたいて喜びながら……

「や—い！弱い者いじめの、大わし、足がら山にやって来ると、ぼくとなかよしの、金太郎さんがいるんだから——」

と、強がって、大きな声でさけびました。

この声に、こぐまも、まるい耳を立てて、岩かげからはい出し、そーっとながめると、こじかの後に、自分のようにまるまる太った人間の子どもが、ニコニコわらって立っていました。

「何者だろう――ぼくのように――後足で立っているぞ――」

人間の子どもを、はじめて見るこぐまは――毛のみじかいからだに着物を着て、くまのように二本足で立って、大きなまさかりをかついでいる金太郎に、目を見はっておどろきました。

だが、こぐまは、人間の子どもの、弱い者をいたわって助けてくれたやさしい心に、感心して好きになりました。そして、こじかのように友だちになりたいと思いましたが、谷川の流れがふかくて急だし、向こう岸のがけもけわしいので、こちらからわたって行くことができません。

で、どうしたら、向こう岸へわたることができるだろうかと考えていると、

コーン！コーン！コーン！

と、谷に、こだまがひびいて……

人間の子どもが、大まさかりをふるって、高い大きな杉の木の、根もとを切りはじめました。

そして、根もとを八、九分通り切りこむと、今度は、両うでに力をこめて……

「うーん、うーん――」

まっ赤な顔になって、杉の木を谷間へ、おしたおそうとしていました。

それで、また、いきをのんで見ていると、

メリッメリッメリッ！！

はげしいひびきとともに、ついに杉の木をおしたおし、向こう岸からこちらの岸へ、どすん！！と、物すごい地ひびきを立てて丸木橋をかけました。

で、このおそろしい力を見て――こぐまも、こうさぎも、こじかまでもが、目をまるくしておどろきました。

また、野うさぎやりすの家ぞくをはじめ、あたりに住んでいるけものたちは、大きな地ひびきに地しんかと、みんなあわててすのなかから、われさきにととび出して来ました。

こぐまは、今まで、この山でいちばん強い者は、自分の父ぐまだと思っていました。それは、森のきつねでも、山のいのししでも、父ぐまの一とたたきで、たたきたおされてしまうからです。

でも、あの、大杉の木を、ただ一人で根もとから、おしたおした人間の子どもの、大力には、父ぐまでも、とうていかなわないだろうと感心していると、

タゝッタゝッタゝッ……

と、すぐ、こじかが、とく意のひづめで、丸木橋を、こちらの岸へわたって来ました。

そして、あたりを見まわしながら……

「おーい、みんな、集まっておいで――この山で一番力持ちの金太郎さんだ。みんなと友だちになりたいって―」

と、大声でよばわりました。

が、けものたちは、こじかの後から、二本足で丸木橋をこちらへわたって来る金太郎が、ピカピカ光る大きなまさかりをかついでいるのを見ると、みんなおそれて、すぐにはだれも、近づいて行こうとはしません。

それで、こじかは、また……

「なにをおそれているんだ。金太郎さんは、やさしい人だから、みんなをかわいがってくださるよ――さぁ、早くよっておいで――」

そういってくれたので、第一番に太っちょのこぐまが、流れの岩かげからノソリノソリ岸へはい上がって来ました。そして、金太郎の人のよさそうな目を見ると、まさかりのこわさもわすれて、

「ぼく、なかよしになりたいんだが――」

と、なかま入りを申しこみました。

すると、こうさぎも、金太郎の足もとへ、ピョンピョンはねて来て、

「ぼくも、友だちにしてください――」

と、ていねいに頭をさげてたのみました。

で、金太郎は、大まさかりを立ち木に立てかけて、ニコニコしながら……

「ぼくの名は金太郎、こじかの名はジロッポ、どうぞよろしく――これからは、みんな、なかよしになろうなァ――」

そういって、あいさつをしましたが、こぐまにも、こうさぎにも、名前がありませんから、たゞ目を、パチクリさせていると、金太郎が、しまったといった顔つきで……

「すまない、すまない、君たちには、まだ名前がついていないんだなァ――、では、ぼくが、よい名前をつけてやろう――こぐまをツキノワ――こうさぎをヤトとよぶことにしよう――どうだ、よい名前だろう――」

「ぼく、ヤトだって――」

こうさぎには、名前の意みがわかりません。で、金太郎は、これをせつ明するように……

「そうだよ、君は、野うさぎだから、ヤト(野兎)じゃないか、そして、こぐまは、月のわぐまだから、そのままツキノワとよべばいいよ――」

「ぼくの名前、ツキノワか、きれいな名だが、だれよりもいちばん強そうな名前だなァ――」

こぐまは、大よろこびです。

すると、そばから、こじかのジロッポが口をはさんで、

「ぼくは、二才じかだから、次郎っぽ――ジロッポという名前なんだ――」

そういっていると、金太郎が、二、三ぽ前に進み出て、まじめな顔つきをして……

「だが、名前が、どんなによくても、いたずら者の集まりではこまるから、みんなよい子になるように、一つここで、やくそくしようじゃないか――」

「よい子になるやくそくだって？」

ヤトには、また、わからなくなりました。

「どんなやくそくを、ぼくらはするのかなァ」

ツキノワにも、よい子になるやくそくがわかりません。

すると、ジロッポが、先ぱいらしい口ぶりで……

「ハヽヽヽ――君たち、あまり、むつかしく考えることはないよ――ぼくたちのやくそくというのは、みんなで助け合って、山や森のくらしをたのしく、いつもげん気にやろうということなんだ――」

と、よくわかるように教えてくれました。